平ぴらぴら伝

其の三
地獄に落ちた！　の巻

金井哲夫

亡霊界の一国一城の主となった「鎧」。しかし家来は、「殿」が下手なことをしないように監視するという目的であてがわれた家老1人と数名の下っ端のみ。

2人だけで城の中にいてもつまらない。最初は将棋やらトランプやらで時間を潰していたが、鎧は鎧で家老にぜんぜん勝てないもので面白くない。家老にしても、鎧は弱すぎてゲームにならないばかりか、負ければ拗ねるし勝てば調子に乗るし、厄介この上ない。そのうち双方とも飽きてしまった。やがて退屈が極まり、下手に動き回らせるなとの上からの命令があったのだが、お出かけをすることにしたのだ。

「殿、どちらへ参りましょうか」

「船がいいな」

「やや、手前は船は苦手でござる。お散歩がよろしいかと」

「船だ。船に乗る」

「お言葉ですが殿は生前、壇ノ浦の合戦において、戦が始まる前に、船の上では立っちゃダメという注意をお守りにならず、船

上で立ってはしゃいで海中に没されましたことをお忘れではあるまいな。お船は不吉かと」
「義経なんか、船の上で立つどころか、ぴょんぴょん跳んでいたではないか」
「関東の人間はお行儀が悪くていけません」
「だけど海に落ちなかったぞ」
「むしろ殿が人一倍鈍くさいわけでして……」
「もう立たないから、船に乗ろうよ、船船船！」
「いけません」
「じゃあ城に帰ってみんなに平曲を聞かせる」
「ははっ！　お船にいたしましょ！」

鎧と家老は揃って夜の壇ノ浦にやってきた。ここでは夜な夜な源平の亡霊どもによる壇ノ浦の戦い夜の部が開かれるという、亡霊の観光スポットになっていた。
家老を手頃な船を探すが、なかなか見あたらない。海岸をしばらく歩くと立派な幽霊船宿が現れた。
「ここなら船を出してもらえそうだぞ。聞いてこい」
「ははっ！」と家老は小走りに船宿に入る。

「おい、女将、船を出してくれ」
「船はあるんですけどね、あいにく船頭が出払っちまいましてね、あいすみません」と船宿の女将が済まなそうに答える。
「そこをなんとか出してもらえぬか、殿の命令じゃ」
「出したいのは山々ですが、いないもんはいないんですよ」
だが家老が奥を除くと、船頭風の若者が一人ごろ寝をしているのが見えた。
「おい、あそこにいるじゃないか」
「え？」と、驚いておかみが振り返るが、男を見て向き直り言った。
「ありゃダメですよ。船頭じゃないんですから。だめだめだめ」

「船頭だろ？　船頭の格好をしてるじゃないか。なんでもいいよ、船をだしておくれよ」
「あれは違うんですって。訳あって預かってる大店の若旦那でね、道楽が過ぎて謹慎していたんですけど、何か仕事をしろと旦那に言われましてね、じゃあ船頭をやると。だけどご覧のとおり、箸より重い物を持ったことのない口ですからね、船頭の見習いはしてるものの腕はまだぜんぜん。危なくて人をお乗せすることなんて……」と2人が揉めていると、その声を聞いて奥の男がむっくり起き上がった。家老はすかさず、女将の肩越しに声をかけた。
「おい、船頭さん、船を出してくれないかい？」
「へ、船頭って、あたしのことですか？　ほんとに？　あたしでよござんす？」
「お前しかいないのだから、よござんすよ。すぐに出せ。殿のご命令だ」
「ほいきた、任せておいてくださいね」と若者は嬉しそうに捻り鉢巻きをすると、女将が止めるのも聞かずに、船宿の脇の桟橋にもやってあった小型の高瀬舟に飛び乗った。
　鎧と家老も船に乗り込み、いざ夜の壇ノ浦へ漕ぎ出そうとしたんだが……。
「なかなか出ないね」
「なかなか出ませんな。おい船頭さん、早くやっておくれ」

「やってはいるんですが……、どんなに押しても動かない……」
「おいおい、まだもやってあるよ」
「あ、なんだ。すいませんが、綱を解いてもらえます？」
「なんだか頼りないね」
「へえ、今日が初めてなもんで……」と船頭が手ぬぐで額の汗をぬぐい、一休みしようかと棹に寄りかかると、船はぐいと進んだ。
「おっとっと、危ないよ！」

船はふらふらと方向が定まらぬまま沖に漕ぎ出したところで、浜に人だかりならぬ亡霊だかりができているのが見えた。
「家老、あれはなんだ？」
殿が人だかりを指さして家老に聞いた。
「おお、あそこにいるのはかの有名な那須与一！」
「え、ありゃ屋島の戦いじゃなかったのか？」
「あちらは扇の的しか見せ場がないんで、こっちに合併したんですよ」
「あれま。しかし、今晩はビッグスター登場だな。敵にとって不足はない」
「おい、もっと船を近づけてくれ」と鎧は船頭に言ったが、船頭は船尾に座り込

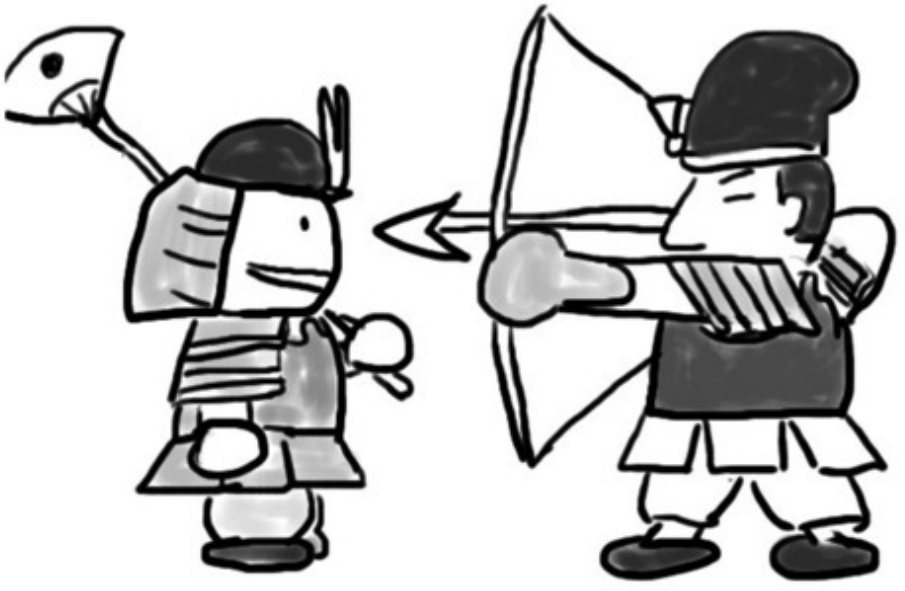
み青い顔をしてうつむいている。船に酔ってしまったらしい。
「それより殿、ここはお約束ですから、あれを」
「おお、扇であるな？　よしよし」
鎧は白地に日の丸の扇を広げた。船内をキョロキョロと見回し、船底に転がっていた長い棒を見つけると、その先端に扇をくくりつけ、頭上に高々と掲げた。
「船頭さん、ここにきちんと船を止めてくださいよ」と家老が声をかける。
「そ、そんなこと言われても、波に言って……うえっ！」
船頭の頼りない言葉どおり、船は行先が定まらずふらふら漂ったかと思うとくるくると回転する。
そのたびに、浜辺の与一のほうを常に向くように、鎧は船上で体を回し首をひねった。船は回転しながら前後左右から海のうねりを受けるものだから複雑に揺れる。それに合わせて、鎧と家老も複雑に体をくねらせて安定を保った。
「与一殿は十一人兄弟の末っ子ながら、ひとつ上の兄を除く九人の兄がみな平家についてしまったので、そのおかげで家督を継いだそうですな。まあ、出世できたのも平家のお陰と言えましょう」と家老は揺れる船の上で船縁を両手で掴み、上体のバランスを取りながらウンチクを述べた。
「なーんだ、そうなのか」と舳先で扇の的を掲げながら、鎧は上体を三次元的に

くねらせてバランスをとりつつ、家老を振り返って言った。
「とは言え、あの扇の的以来、とくに目立ったこともなく、30歳ぐらいで死んでしまったのです」
「ありゃま」
「とくに目立ったこともなく死んでしまったところなど、殿と通じますな。わっはっはっ」
「褒めてるの？」
家老は答えず、遠くの岸辺の馬上からこちらを眺めている与一を見て言った。
「さあ、殿、与一殿に例のお言葉を」
家老に急かされ、しかしくるくる回る船の上で自分もくるくる回りながら鎧は浜辺に向かって叫んだ。
「やーい、ヨイチー！　平家のおかげで家督を継げたんだぞー！　それがなければ、お前なんかタダの弓オタクだ！　ばーかばーか！　口惜しかったこの扇を射貫いてみろー！」
鎧はあかんべーをして、揺れる船の上に立ち上がり、後ろを向くと体を折り曲げて尻を突き出し、股の間から右手の中指を立てて見せたが、船が大きく揺れると、そのまま前につんのめり船底に顔面をぶつけた。

それを聞いて怒った与一、弓を携えざぶざぶと馬を海に乗り入れた。
「我を下野国の住人那須太郎資高の子、与一宗高と知っての挑発か？」
鎧はだらしなく体を起こし、家老を見て言った。
「……だれ？」
「那須与一殿の名乗り用の長い名前でございますよ。名だたる武将は、一騎打ちの際に、誇らしげに長い名前を言い合ってご挨拶するのでありますよ。それに引き替え殿は簡単でよろしい。殿のお名前は平の……、タイラの……、あれ？」
「くそ生意気な！」と鎧は陸に向き直り、さらに与一を挑発した。
「やい、ダイコン！　じゃなくてイモー！　じゃなくてナス！　そんなにご挨拶が好きなら、こっちもしてやろうじゃねーか！　おひかえナスって、おひかえナスって。ナスがママならカボチャがパパよ。あ、とーちゃん酒飲んで、よーっぱらって死んじゃった。かーちゃんそれ見て、しっくりかえって死んじゃった、とくりゃー！」
鎧は棒の先につけた扇を振り回しながら得意になって歌っている間、船はすーっと与一の方向へ引きつけられるように進んでいった。あちらからも、与一は馬を進め、遠浅の波打ち際をざぶざぶと近づいてくる。
「あー、ばかばか！　岸に近づけるやつがあるか！」

「潮の流れで、しかたないんす……」
と船頭はなす術もない様子。距離があるからといい気になっていた鎧だが、船が与一に接近しはじめると急にうろたえ、揺れる船底の上を四つん這いになって船尾に移動し、へたりこんでいた船頭を前に押し出して、その陰に隠れた。
「意外と遠浅ですな」と家老は冷静に、ざぶざぶと近づいてくる与一を見て言った。
「引け引け、ばか！　引けったら！」
だが船頭は完全にのびている。
「こんなに近づいたら当たっちゃうじゃないかよ！」
思いあまった鎧は、姑息な手段に出た。
「こうしてやる！」
鎧は扇を縛り付けた棒をデタラメに大きく揺らした。
「これでどうだ、ナスビ野郎！　当てられるもんなら当ててみろ！」
しかし那須与一は動じず、弓にかぶら矢をつがえてきりきりと弦を引いた。鎧は必死に扇を上下左右に振りまわすが、与一の矢の先はまったく動かない。
そのとき鎧は気がついた。与一が狙っているのは扇ではなく、鎧の眉間だったのだ。その間も船は与一に近づく。与一は弓を構えた上体のまま、さらにざぶざぶと海の中へ馬を進める。やがて船は、舳先が馬のきらびやかな鞅（胸の飾り）

にこっつんと接触して止まった。
「南無八幡大菩薩」と、与一は弓を絞る。
「うっ」と言葉を失い固まる鎧。次の瞬間、矢は放たれた。与一は小兵と言えど矢は十二束三伏、弓は強い。それは兜鉢（兜の真ん中の飾り）に見事命中し、鍬形（兜の上に突き出たぴらぴらしたやつ）が左右に飛び散り、ひらりひらりと舞って海に落ちた。衝撃で気を失った鎧は、そのまま後方にゆっくりと倒れ込み、背中から海中に沈んでいった。
　それを見ていた平家水軍は船端を叩き、陸の源氏軍はえびらを叩いて大爆笑。
「あら、また沈んじゃったね」と家老は、ちょいと鎧が沈んだあたりに目をやったが、ゆうゆうと浜へ戻っていく与一の後ろ姿のほうを見ながら落ち着いて言った。
「船頭さん、帰るよ。船を戻しておくれ」
　しかし船頭は船尾でぐったりとのびている。
「船頭さん、しっかりしておくれよ。どうしたんだい」
「へえ、なんか船に酔っちゃいまして、頭がぐるぐると



……」
「そりゃあんたがしっかり棹で船を止めておかないからだよ。困ったもんだね」
「仕方ないじゃないですか、あのお侍さんがあたしの棹を持っていって扇を縛りつけちゃったんですから」
「なんと！　じゃあ棹がないのかい？　どうするんだよ、あんた」
「すいません、ダンナ、船を呼んでもらえませんか……」

壇ノ浦に二度沈んだ鎧とその家老は、二人並んで、源平亡霊合戦ショーが終わって静まりかえった丑三つ時の海岸を、城に向かってぼとぼと歩いていた。
鎧は、那須与一に完敗した悔しさと、調子に乗って墓穴を掘った恥ずかしさとが入り交じり、やるせない心持ちだった。
「しっかしムカツクなぁ」と鎧は歩きながら道の小石を足で蹴った。
「あれだけ怒らせれば、当然の結果ですな。那須与一が至近距離から矢を放ったのですから、一撃必殺……」
「ていうか、あいつらのダラダラ長い名前がムカツクんだよな」
「ああ、下野国の住人那須太郎資高の子、与一宗高……ってアレですか？」
「そうそう、それそれ。えっらそうになー」

「清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が長子、鎌倉ノ悪源太義平なんてのもいましたな」

「長けりゃいいってもんじゃねーや」

「ははーん、コンプレックスですな？」

家老はからかうように言った。

「殿も長い名前を名乗ればいいじゃないですか。あんなのみんな適当に言ってるだけですから」

「名乗りたいが、自分の名前が思い出せんのだ」

「なーに言ってるんですか、殿の名前はタイラの……、タイラの……、あ、やっぱりわからない。どうせ大した名前じゃなかったんですよ。平凡すぎて覚えられないような。だからご安心なさい」と家老はまったく気に

しない。

「他人事だと思って……」と鎧は口を尖らせる。

「まあまあ殿、そんなことより、死んでてよかったですなぁ。生きてたら死んでたところです。よかったじゃないですか、命に別状なくて」と、家老はよくわからない特別に誠意が感じられない慰め方をした。

「しかし殿、こうして普通に生活していると、死んでる気がしませんな。幽霊にも昼間歩けないとか、うまいものが食えないとか、まあまあれこれ制約がありますが、生きてるときも窮屈なもんでしたからなぁ。それに比べると、死ぬ心配をしないでいいだけ、気楽なもんで。武士にとって生きるとは死ぬことなり、なんてワケのわからないことをとやかく言われましたが、私に言わせりゃ、とにかく死なないように頑張ることですよ。死ぬのが武士の仕事なら、殿のように戦が始める前に足を滑らせて海に落ちて死んじゃったマヌケ野郎が一等賞じゃないですか。ねえ、殿？」

返事がない。
「あら、とのぉー？」
すっかり持論の展開に夢中になり、家老は隣を歩いていたはずの鎧の姿が消えたことに気がつかなかった。振り返ると、遙か後方の暗い道の地面が、一部ぽんやり赤く光っている。何ごとかと駆けつけると、道のまん中に直径1メートルほどの穴が開いていて、そこから赤い光が漏れていたのだ。
「こりゃまたなんと……」と穴を覗き込む家老。
すると突然、家老の足首が何者かに掴まれた。見ると赤く光る穴から延びた1本の黒い手が家老の足を掴んでいる。
「ひーっ！　こら、放せ！　この化け物！　放せったら放せ！」と家老は掴まれた足をバタバタさせながら、おぼつかない手つきで刀を抜こうとしたが、錆びて抜けず、鞘ごと腰から抜き取り、鞘の端で黒い腕をぱたぱたと叩いた。
そのうち穴からもう1本の腕が出てきたかと思うと、大きな黒い頭がぬっと現れ、叫んだ。
「家老、このやろー！　てめー！　殺す気か！　早く引っ張れ！」
家老はそれが"殿"であるとわかると、はっと我に返り、慌てて鎧を引き上げた。鎧は地面にごろりと仰向けに横たわり、荒い息で言った。

「死ぬかと思った……」

「だから死んでるんですって、私たちは」と諭すように家老が言うと、鎧は家老をキッと睨み付け、体をゴロリと転がして腹ばいになり、肘をつかって穴のところまで這っていった。そして穴を覗き込んでから、家老に顔を向けて、お前も覗いてみろと合図した。

家老も腹ばいになり、穴から下を覗き込んで驚いた。それは土を掘って作られた穴ではなく、別の空間とこちらの空間の間にあいた穴だった。その証拠に穴に頭を突っ込んでみると、穴の向こうからは自分が乗っかっている地面の裏側が見えるはずなのに、それがない。あちらの空間に、ぽっかりと穴だけが浮かんでいる状態だ。

数十メートル下に見えている穴の底は、どこまでも広がる火の海だった。ところどころに岩

が頭を出していて、そこに大きな鬼が金棒を持って立っている。
「家老、わかるか？」
鎧は声を殺して家老に言った。
「こりゃなんとも、まるで地獄ですな」
「本物の地獄だよ、見ろ。あそこに鬼がいる。大きな金棒で、浮かんできた亡者の頭を火の海の中に押し戻してる」
そのとき、鬼の一人がこちらを見上げた。目が合ったかと思うと、鬼はニヤリと笑って手を振った。
家老は「ひえっ！」と慌てて穴から顔を引っ込めた。
「死にます死にます。あんなところに落ちたら、死んでる人間ですら死にます！」
と家老は起き上がりながら、冷や汗を浮かべた顔で言った。
「しかし殿、よくぞご無事で。間一髪でしたな」
「や、落ちたんだよ。ずっぽり」
鎧も起き上がり、地面にあぐらをかいた。
「落ちたらな、あの鬼野郎がワシを見て言ったんだ。『あんた誰？』って。ワシは平だって言ってやったよ」
「ほう、そしたら？」

「そんなヤツは知らないとこきやがった」
「苗字だけじゃあねぇ」
「もっと大物を落とすために、あそこに地獄の落とし穴をあけたんだと鬼は言いやがる。壇ノ浦の近くなら、有名な武将の亡霊が落ちてくるだろうと踏んだらしいんだが、それがなかなか落ちて来ない。やっと落ちたと思ったら、ワシだったと。そこでワシは、じゃあ、もっと大物を落としてやるから、そのかわりワシをここから出せと持ちかけた。そして交渉成立。よほどの大物を落とせば、それなりにボーナスもくれるということだ。どうだ、家老」
「ほー、無名の小物でよかったですなぁ、殿！　それで、大物てのは、どんなんです？」
「ワシも鬼に聞いたんだよ。そしたら鬼は笑って言いやがった。そりゃお前、名前が長いヤツに決まってるだろうって」
「やっぱり、長い名前ですか」

「ったく、ムカツクったらありゃしない」
「それで、長い名前のやつらをどうやって落とす気ですか？」
「そこなんだよなー問題は」と鎧は立ち上がり、ふらふらと歩き始めた。
家老も慌てて立ち上がり、鎧の跡を追う。
「こうしたらどうでしょうな。名前が長い連中ってのは、偉いから重い鎧を着ております。つまり、名前の長いやつらは重いわけですね。だから重いやつだけ落ちるように、穴に軽く蓋をしておくって寸法です」
「家老もなかなかの悪じゃのう。むふふふ」
というわけで、地獄の落とし穴に重い人馬だけが落ちるように細工をし、ちょいと離れたところ何食わぬ顔をしていると、さっそく「むひー！」と馬の悲鳴が聞こえてきた。そして、従者らしい男がこちらに走ってきた。
「もし、お願いがござりまする！」
若い武士が慌てた様子で息を切らせている。
「どうなされましたか？」と家老が尋ねる。
「拙者は、清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道法性院大僧正、

徳永軒機山信玄大居士の家臣の亡霊にてござりまするが……」
　鎧は家老の顔を見たが、家老は肩をすぼめて見せた。
「だれ？」と鎧は尋ねた。
「ですから、清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道法性院大僧正、徳永軒機山信玄大居士の家臣の亡霊にてござりますれば……」
「……コジ？」
　すると家臣の亡霊、あきれたような顔をして言った。
「いわゆるかの有名な武田信玄公の本名、というか戒名でござる！」
「なら最初からそう言え！　ったくどんだけ長い名前なんだ……」と言いかけた鎧と家老の目が合い、二人はにやりと笑った。
「時代考証はめちゃくちゃでござるが、まさに大物でござる」と家老。
「ボーナス、ボーナス！」
　二人は喜んで手を握り合い、くくくっと笑った。
「何を嬉しそうにされておられる。緊急事態でござる！」と従者は焦った様子で言った。

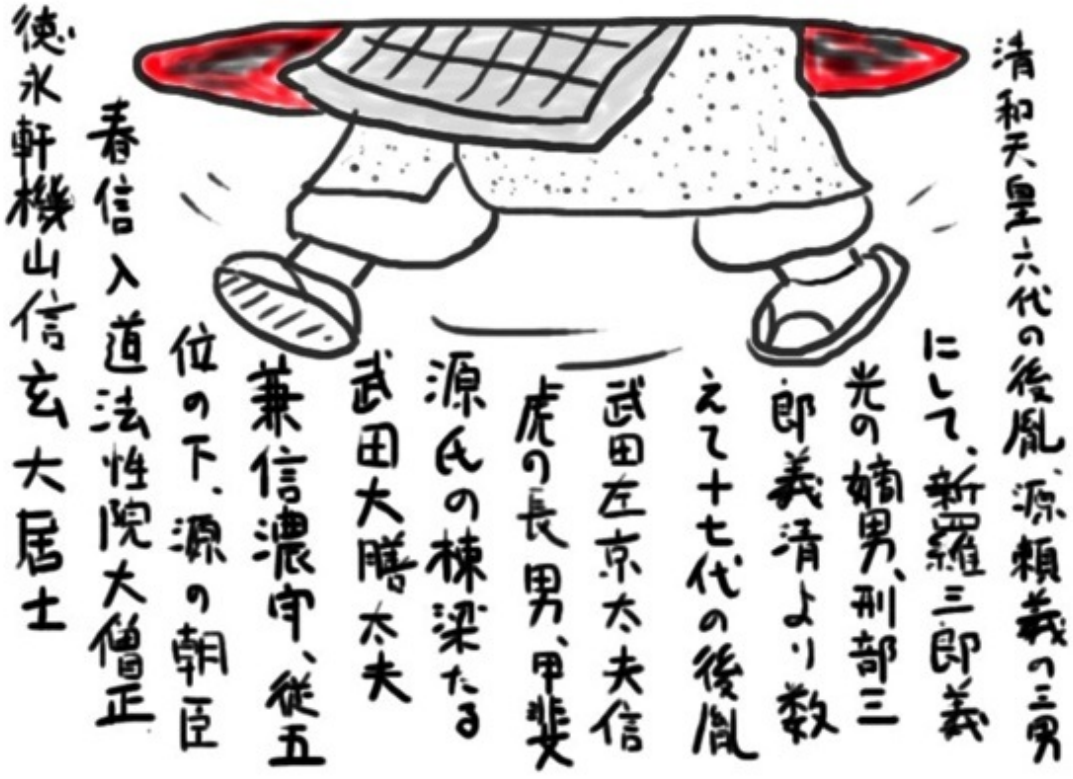
「我が殿、清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道法性院大僧正、徳永軒機山信玄大居士は、その先の赤く光る穴にはまり、辛うじて縁に手をかけ落ちぬように踏ん張っていますが、このままではいつ落ちてしまうかと……」

「え、あの穴に？」と急に鎧の目が輝いた。

「はい、ぜひともお助け願いたく！」と従者は必死に助けを請う。

「ああー、もちろん。さっそくお助けにあがりまするぞ、清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十……なんだっけ？」

「清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の



太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道法性院大僧正、徳永軒機山信玄大居士でござる！」

「ああそうであった。おい家老、聞いたか！清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道法性院大僧正、徳永軒機山信玄大居士殿が穴に落ちられた！」

「ええっ！　あの清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従五位の下、源の朝臣、春信入道

法性院大僧正、徳永軒機山信玄大居士様が穴に？　これは一大事！」
「早くしてくださいー」と従者が泣き声でやきもきする。
「ではさっそく、清和天皇より六代の後胤、源の頼義の三男にして、新羅三郎義光の嫡男、形部三郎義清より数えて十七代の後胤、武田左京太夫信虎の長男、甲斐源氏の棟梁たる武田大膳の太夫兼信濃の守、従六位……」
「もう、シンゲンでいいからー！」と従者が口を挟む。
「わかったわかった。では行きましょう」と鎧が歩きかけたとき、家老が呼び止めた。
「殿、もちろんお助けしますが、もしものことがあるといけないので、面積契約書に一筆いただかなければなりませぬ。これにご本人のお名前をちょうだいしたく……」と紙と筆を差し出し、従者に見えないように鎧にウインクして見せた。
「あとではいけませぬか？」
「それではお助けできません」と鎧。
従者はひったくるようにして紙と筆を受け取り、名前を書きかけて言った。
「武田信玄でいい？」
「ご本名で」
「えー、全部書くのー？」と家臣はしぶしぶ紙を受け取り、長いほうの名前を書

き始めた。
「あ、それからフリガナも……」と家老が横から口をはさむ。
「ナイス！」と声に出さず、家老をみてニヤリと笑う鎧。
と、そんなことをしているうちに、あの穴のあたりから「うにゃー！」と奇妙な悲鳴が聞こえて、続けてドスンと大きな地響きがした。清和天皇より六（後略）は力尽き、地獄の穴に落ちてしまった。

さてさて、このみごとなコンビネーションにより超大物を地獄に叩き落とすことに成功した鎧と家老は、後に鬼から表彰され、褒美として、地獄に落ちてきた、いじめてもつまらない平家の下級武士数十名の家臣付きで現世に戻され、つまり生き返って、本当の一国一城の主となったのでありました。

めでたしめでたし。

平ぴらぴら伝　地獄に落ちた！ の巻

http://p.booklog.jp/book/64096

文豪堂
著者：金井哲夫
絵：中川善史
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile
文豪堂書店ブログ：http://bungoudou.blog.fc2.com/

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/64096

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/64096

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ